特集

人間学部児童教育学科准教授
Satoru FUJITANI 藤谷 哲

人間学部児童教育学科教授
Reiji YAMAMOTO 山本 礼二

児童教育学科の遠隔授業と「真に対面授業で実現すべきこと」

1. 小学校教職課程と遠隔授業

小学校（初等教育）は、適確な言語の理解もままならない6歳児からの子どもたちを預かり、日本語の会話・読み書きや計算の導入などの技能、学びに向かう姿勢を育む場であろう。その結果としての自己調整学習（Zimmerman, 1986; ジマーマン，シャンク，2006）の態度など、児童が今後社会と関わりを構築するために必要なごく基礎的な術を一から獲得する場であると小学校をみなすとき、今般の遠隔授業の取組要請は、手書きや所作、実演、非言語・言語コミュニケーションなど、小学生の学習指導のために必須な指導技術の習得に関しては万全にはほど遠いと教員が感じざるを得ない状況を生み出しているといえよう。

また、文部科学省（2020）が2020年6月下旬時点での

今般の感染症の影響を踏まえた学習指導等に関する状況について学校設置者を対象に行った調査において、学校が課した家庭における学習の内容を尋ねた項目では、小学校は、中学校以降すなわち上級の校種と比べ、テレビ放送の活用が同程度の割合であった他は、学習動画、デジタル教材、同時双方向形式での指導といった内容はいずれも実施したと回答した設置者の割合が低かった。小学校での学びは遠隔授業との親和性が他の校種と比べて低く、その小学校教職課程と遠隔授業はどのような関係であるべきかは、大学関係者への大きな問いかけであると言わざるを得ない。

国立情報学研究所（online）は、「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」と題して、『遠隔講義に関して検討がなされている状況（中略）の中で、遠隔授業等の準備状況に関する情報を出来る限り多くの大学間で共有することを目的』として、遠隔授業の実践状況の報告を収集している。本稿脱稿時点である2021年冒頭からはこれを「大学等におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム「教育機関DXシンポ」」と位置づけ直して、引き続き情報収集・発信を行っている。ここに2020年末までに収集された内容についてみると、小学校自体からの報告（茂木, online; 鈴木 online）、自治体全体で取り組んだ公立小学校の体制整備（塩津・本田, online）も取り上げられている。もちろん大学からの報告は、実に多彩な学問領域からのものがみられる。ただ、小学校教職課程を設置する大学の学科からの報告については、オンデマンド型遠隔授業の音声情報の有無が授業内容理解にどのような影響を与えたと教員・学生が考えたかを問う調査（大橋, online）がみられるのみである。

このような状況に鑑みて、小学校教職課程を設置する学科という児童教育学科の特徴があるからこそ明らかにできる遠隔授業の取り組みの成果を取りまとめるという動機で、あえて対面授業に対する項目も問うた、児童教育学科科目担当教員対象の遠隔授業に関する調査を企画・実施した。本稿ではその結果について示す。これを通じて、小学校教職課程と遠隔授業との関わり合い方について検討したい。

2. 調査の概要・方法

筆者らは、秋学期の2020年11月、児童教育学科学科会議での了解を経て、学科科目担当教員への遠隔授業に関する質問紙法による調査を実施した。調査では、まず、（1）児童教育学科科目は、遠隔授業がどのような方式で多く行われたかを明らかにする。次に、（2）児童教育学科科目指導教員が「真に、対面授業で実現すべきこと」を意識し、そう強く感じた点を明らかにする。以上2点を調査のねらいとした質問をおこなうこととした。調査対象者は、2020年度の、（A）児童教育学科の専門教育科目（セミナー科目を除く）・教職課程科目、ならびに（B）履修者が児童教育学科学生だけで構成されている共通教育科目、のすべて（オムニバス科目を除く）の担当教員である。調査対象者に電子メールにより問合せを行い、回答を回収した。問合せを、該当教員34名のうち電子メールアドレスが判明した33名に問合せを行い、23名（問合せした教員の70％）から、回答して電子メールを返送するか、回答用に準備したWebサイトへの記入により回答するか、いずれかの方法により回答（質問紙の一部のみご回答下さった方を含む）を得た。

質問は次の項目からなるものであった。（1）春・秋学期科目の『15回の運営方法のうちわけ』。本学で取りまとめた遠隔授業の説明資料（目白大学, online）に示した遠隔授業の型（同時双方向型、オンデマンド型、講義録型、課題型、［秋学期］対面授業）別の授業回数。（2）遠隔授業で大変だったこと、の自由記述。（3）遠隔授業を通じて『学生の反応を得る』ために工夫したこと、の自由記述。（4）遠隔授業を通じて感じた『真に、対面授業を行わないと実現できないこと』、の自由記述。（5）遠隔授業を行ったうえで『対面授業のよいところは何か』、の自由記述。（6）秋学期に一部・全部の授業回で対面授業を行った科目について『対面授業を行った理由と対面授業をおこなって良かったことは何か』、の自由記述。

3. 調査の結果

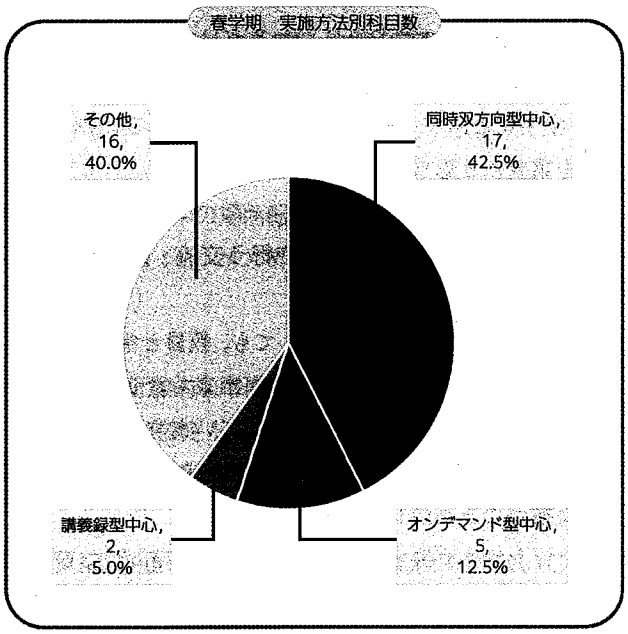
紙幅の都合で、一部の項目について報告する。

(1) 授業の運営方法のうちわけ

2020年度の児童教育学科の専門教育科目・教職課程科目、ならびに履修者が児童教育学科学生だけで構成されている共通教育科目は計112科目であった。このうちのべ90科目（問合せした科目の80％）の回答を得た。

まず、大部分の回で実施方法が同一であった科目について述べる。本学で取りまとめた遠隔授業の説明資料に基づいてうちわけをご回答いただいたが、春学期（回答のあった科目数のべ40）は、すべてを「同時双方向型」、ないしは授業週数が13であったことから「同時双方向型13＋課題型」と答えたもの【同時双方向型中心】がのべ17科目で最も多かった。続いて「オンデマンド型13＋課題型」の回答【オンデマンド型中心】がのべ5科目であった。なお、「講義録型15」【講義録型中心】は2科目あった。秋学期（回答のあった科目数のべ46）は、「同時双方向型15」の回答【同時双方向型中心】がのべ18科目で最も多かった。一方、これはキャンパス全体における児童教育学科の特徴でもあるが、その次に多かったのは、「対面授業」を多用した科目であった。「対面授業15」ないしは「対面授業13以上」に「同時双方向型」「オンデマンド型」「課題型」のいずれかが「1または2」の科目【対面授業中心】がのべ11科目あった。「オンデマンド型13以上」に「課題型」を組み合わせた科目【オンデマンド型中心】が2科目、「講義録型15」【講義録型中心】は2科目あった。以上から、科目の大部分の回の実施方法が同じであった科目については、「同時双方向型中心」が最も多く春・秋で科目数がほぼ同数であった一方、春学期に比べ秋学期は「オンデマンド型中心」が減り、秋学期に「対面授業中心」が増加したことになる（図1）。なお、通年科目である教職課程科目「教育実習」関連科目（回答のあった科目数のべ4）については、その実習への参加が対面授業となり、その他の回は、1科目がすべて「同時双方向型」、1科目が「同時双方向型」と秋学期事後指導「対面授業1」、1科目が「同時双方向型」を中心に、加えて「オンデマンド型」「課題型」との回答であった。

上述以外の科目【その他】は、その大部分が「同時双方向型」と「オンデマンド型」を何回かずつ組み合わせたも



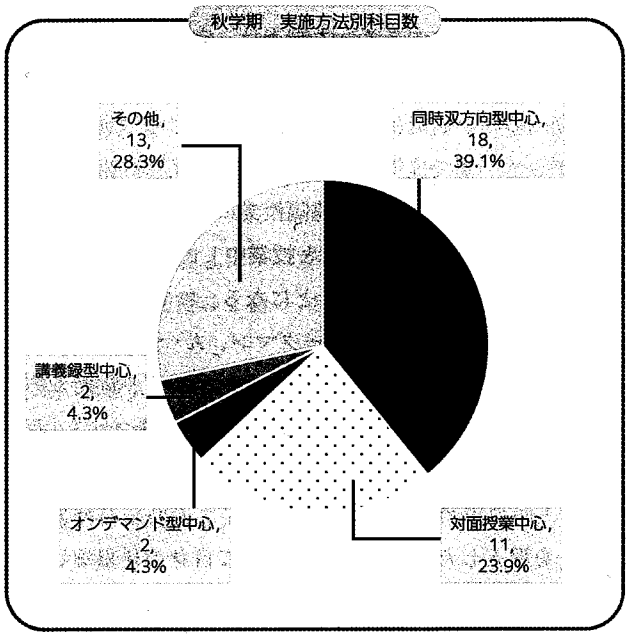


図1　実施方法別科目数

の、または「課題型」を加えた3種類の組み合わせの科目であった。

ここで、本調査で特筆すべきこととして、本調査では複数の科目担当教員が「1回の授業で、オンデマンド型と同時双方向型の両方」という授業を開講したと回答したことを挙げる。これは、授業に相当する内容をオンデマンド型の教材を用いた予習の位置づけでネット経由にて視聴させた上で、指定の授業時間帯の中で同時双方向型の授業もネット経由で実施するというものである。これが多数の回での開講方法であった科目はいずれも春学期であり、「両方」を3分の1以上の授業回で取り入れた科目はのべ7科目、そのうち「両方」を授業週数で13以上の回で取り入れた科目ものべ4科目あった。

これらの科目の取り組みは、授業時間の使い方あるいは授業の設計に着目した教育方法の概念である「反転授業(flipped classroom)」を想起させる。反転授業は一般に「説明型の講義など基本的な学習を宿題として授業前に行い、個別指導やプロジェクト学習など知識の定着や応用力の育成に必要な学習を授業中に行う教育方法」を指す用語である(山内・大浦, 2014)。ここにおいて、授業前に行う学習はネット経由の動画等の教材視聴による。学校に登校すると学校では対面授業を行うが、このときに学習内容の説明ではなく、応用的な学習活動に取り組むのが、反転授業である。本調査は、実施した遠隔授業をどのような形式で行ったかを問うた。したがって、授業時間内の内容構成は、授業時間帯のはじめに動画などオンデマンド型で提供して、その後、授業時間帯の途中から学生は同時双方向型の遠隔授業に参加する。つまり授業時間の使い方が「授業前と授業中」ではなく「授業中前半と授業中後半」ということになる。

反転授業を主唱したJ・バーグマン、A・サムズは、後に、集団での学習をアクティブ・ラーニングや同時双方向型の学習環境の双方向性をいかす場と位置づける「反転学習(flipped learning)」を示している。本調査一部回答者は「1回の授業で、オンデマンド型と同時双方向型の両方」を導入したことで、結果として自身の科目をこの反転学習の運営方法に位置づけた。学習内容の説明を、学習者が望めば反復視聴も可能であるオンデマンド型で、一方集団学習ならではの取り組みや実技、アクティブ・ラーニングの実践を同時双方向型で、という学習活動を編んだことが、推量できる。

(2) 対面授業のよいところは何か

本調査では、あえて、遠隔授業を行ったうえでの、対面授業のよいところについて尋ねた。自由記述回答を筆者らで大まかに分類した結果を、回答例を示しながら説明する。

(あ) 学生の反応や理解度をみきわめながら説明が調整できること

「学生の反応を見ながら内容を調整できるところ。デリケートな内容は特に、対面で反応を見ながらていねいに説明したい。」

「ちょっとした疑問も放らずに解決しやすいこと。」

「教員―学生、学生間でコミュニケーションを取りながら、クラス全体で理解度を確認しながら授業を運営できる。」

(い) 学習環境としての集団の学びに良さがあること

「学生同士の学び合いが出来ること。」

「物理的に隣に誰かがいること。肩を組んで連帯感をもつようなことはできない。」

「教師が学生の様子を見られるだけで無く、学生がお互いの様子をみられること。」

「学生にとっては学ぶという空気中に居るということも重要だと思う。」

(う) 学生にとって学生同士で行う交流・反応の融通が利くこと

「たとえ講義科目だったとしても、教員と学生、あるいは学生同士に見えない繋がりが出来ており、その中で授業が進んでいたことを痛感しています。」

「学生同士が、自然に取り組み態度や参考書等で情報交換ができ刺激し合える。」

(え) インフォーマルコミュニケーションが執りやすいこと

「指導者と学生の視線や雰囲気で、互いに理解できる

ことがある。」
「インフォーマルなコミュニケーションが起こるのは、対面ならではだと思います。学生と教員間だけではなく、学生間においても同じことがいえると思います。一見、関係のないようなこともありますが、こうしたコミュニケーションが学びを深めるために役立っていたと、あらためて感じています。」
「何と言っても、言葉以外の学生の反応が掴めることである。」

(お) 対面授業場面でのみ体験可能なことが指導できること
「対人関係を学ぶグループワークトレーニングの体験学習。」
「指導法や教育実践に関わる授業の場合、実際に個人・グループでの活動を行いながら、授業を進めることができる。」
「音楽は「鑑賞」「楽典」以外は対面授業でしかできない。」
「教育方法や模擬授業に関し、授業の空気感を、学生に伝えたり自分で体験してもらえるところ。」
「授業規律などの指導が出来る。(し易い)」

(か) 学生自宅のスペースの狭小さが解消できること
「十分なスペースで作業ができること。」
「十分なスペースで学習活動ができること。」

(き) ネット接続中の場面転換による時間ロスが無いこと
「ディスカッションの時間を長めに確保することができること。」

(く) 教員の付加的な準備負担が少ないこと
「配信や課題設定などの付加的な準備の必要があまりない(教員の負担が少ない)。」

(3) 真に、対面授業を行わないと実現できないこと

遠隔授業を通じて、授業者は『真に対面授業を行わないと実現できないこと』を見いだしたか。自由記述から筆者らで回答を分類した。これも回答例を示しながら説明する。

(あ) 各自の学習活動・作業に個別の助言・支援をすること
「個別で思考し記入している時間に、意図的に個別の助言をすること。(チャットでは、十分にニュアンスが伝わらない。)」
「学生が作業をしている過程に合わせて声をかけること。」

(い) 空間を共有することで学生が不安を低減すること
「毎年、基本的な知識・技能を習得するために簡単な実習を行っています。学生の感想には「周りの人の様子が分からないまま作業を行うのが不安だった」という感想が多く見られました。同じ空間で作業することで得られていた教育的効果は大きかったです。」
「学生の環境によっては、自己表現に制限がかかる(顔だしできない、近くに家族がいて話しにくい)場合があり、対話を中心とした授業やグループワークには、難しさを感じました。」

(う) インフォーマルコミュニケーションの役割を学ぶこと
「表情や間合いといった非言語コミュニケーションが重要な役割を果たす活動は、遠隔では十分な教育効果が得られない。」
「朗読やスピーチでの聞き手の反応を話し手が掴むこと。」
「雰囲気の大切さについては、実現できない。」
「影響力の獲得のし合い。」

(え) 複数人で音声言語表現や同時の所作を行うこと
「身体を動かして複数人で活動すること(授業でのゲーム的活動 例.英語カルタ)。」
「シートなどに記入しながらグループで話し合い進める活動。」
「合奏、合唱。」
「組体操。」

(お) 音声言語表現に対する即時のフィードバック

「音読など、音声言語に対して即時のフィードバックを与えること。」

「「いまのいいよ！」とか「そこ気をつけて!」など、学習活動でのその場、その時に必要な言葉がけ。」

(か) 暗唱等、記憶と再生を確認すること

「英語のストーリーの暗唱（カンペを見て読んでいても、わからない)。」

「数量や図形などについて問題を処理する技能を持ち込みなしの試験で確認すること。」

(き) 大規模・高価な備品を用いた授業

「音楽技能を同時双方向で教えること（防音等環境の不備、楽器の不備、電波の不備、オーディオインターフェース等の機材の不備等)。」

「大学にある設備や楽器を用いないとできないこと。」

(く) 五感を扱い理解を図るもの、実演、実物を用いた授業

「心理検査に関する演習が遠隔では実施できない内容があった。」

「動植物の標本、地層標本を用いた授業。」

「フェアトレード製品を実際に触ったり、味わったりなど、五感を使って、感じること、そこから考えること。」

「Show & Tell という、小学校英語で重要な「自宅から大好きなものを教室に持ってきてプレゼンをする」というアクティビティが、写真を共有しながらの発表になった。」

「質感や触感をともなった内容。」

(け) 感性や情操にも関連する真正さを学ばせること

「細々（こまごま）とした用具の扱いやコツを伝えること。」

「その場でデモンストレーションをして見せたり、学生に活動を体験してもらったりして、教育方法を学生に伝えること。」

(こ) 危険予知・危険回避

「授業中における危険回避などの、安全指導。」

4. おわりに

今後場合によっては、私たち大学教員は学生に「大学に集まって授業をする意味を問われる」立場になる可能性があるのではないか。筆者らは、長期に亘る遠隔教育の要請という現実を経て、このような思いを持つようになった。これに基づいて本報告を行った。

初等教育は、適確な言語の理解もままならないところより、日本語の会話・読み書きや計算の導入などの学びから始まる。本稿を通じ、あえて対面授業でしかできないことを洗い出したことの意義を認めたいと考えている。対面授業を行わないと実現できないことがある以上は、学生を通学させないといけない。多くの教員が改めて対面授業の価値について具体的な指摘をしていることは、本稿の意義であると考える。

一方、初中等教育では「教育データ標準化」の動きがある。たとえば学習指導要領の文章にタグ（学習指導要領コード）を付け、電子媒体の教材にこれと対応付けをさせ、相互に交換、蓄積、分析が可能となるように収集するデータの意味を揃えることによる効果を図ろうとするものである（文部科学省, 2020)。この現状に鑑みると、小学校教職課程設置学科の授業者として、教科等の指導におけるICT活用・遠隔授業への理解も今後、より必要となる。授業にどのような価値を置いて設計をしていくかが問われているといえる。

紙幅の都合上、回答の一部のみを整理した報告となった。今後より詳細な分析を行うことが今後の課題である。

ご協力いただいた科目担当教員各位に記してお礼申し上げたい。

参考文献

Zimmerman, B. J. (1986). Becoming a self-regulated learner:

Which are the key sub processes? Contemporary Educational Psychology, 11, 307-313.

B. J. ジマーマン，D. H. シャンク（2006）．自己調整学習の理論．塚野州一編訳．北大路書房．

文部科学省（2020）．新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた公立学校における学習指導等に関する状況について．https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf（最終閲覧日2020年12月15日）

国立情報学研究所（online）．大学等におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム「教育機関DXシンポ」（2020年末まで『4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム』）．https://www.nii.ac.jp/event/other/decs/（最終閲覧日2021年1月8日）．

茂木俊浩（online）．私立小学校におけるGIGAスクール構想を超えたオンライン授業を含むICT教育への取り組み．【第22回】4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム．https://www.nii.ac.jp/event/upload/20201211-08_Mogi.pdf（最終閲覧日2020年12月15日）．

鈴木秀樹（online）．Face to Face の教育／学びのSide by Side．【第15回】4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム．https://www.nii.ac.jp/event/upload/20200904-07_Suzuki.pdf（最終閲覧日2020年12月15日）

塩津昭弘，本田裕紀（online）．子どもたちの学びを止めない熊本市におけるオンライン授業の取組」．【第10回】4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム．https://www.nii.ac.jp/event/upload/20200605-9_ShiozuHonda.pdf（最終閲覧日2020年12月15日）

大橋恵（online）．オンデマンド型遠隔授業に対する大学生と教員の評価．【第21回】4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム．https://www.nii.ac.jp/event/upload/20201120-08_Ohashi.pdf（最終閲覧日2020年12月15日）

目白大学（online）．目白大学の遠隔授業．https://www.mejiro.ac.jp/univ/course/remote/（最終閲覧日2020年12月15日）

山内祐平・大浦弘樹（2014）．序文．J・バーグマン，A・サムズ著，山内祐平・大浦弘樹監修，上原裕美子訳，『反転授業』．オデッセイコミュニケーションズ．pp.3-12.

文部科学省（2020）．文部科学省　教育データ標準．https://www.mext.go.jp/a_menu/other/data_00001.htm（最終閲覧日2020年12月15日）

ISSN 1881-6827

No. 15
March 2021

特集｜遠隔授業

人と教育

高等教育フォーラム

目白大学高等教育研究所所報

編集後記

2020年度は、まさに新型コロナウイルスに始まり、新型コロナウイルスで終わる年となりました。2021年2月現在も明るい先の見通しが見えず、我々の社会がどう落ち着くのか不安に満ちているように思います。しかしそのような中でも、大学が取り組んだ「遠隔授業」は、遠隔授業の良い面、活用できる面、効果が高い面をはっきりと映し出すものとなりました。一方でデメリットもあります。疲れ、集中力、生活リズム、運動不足、そして何より「関わりの希薄さ」を招くものにもなっています。日常だった、授業が終わった後の「今の授業ってさ～」、「今日この後さ～」、「最近さ～」という学生同士のオフの会話、こういった温かいつながりが無い孤独さ。「オフ」は、大学が提供していた価値の一側面のようにも感じられます。

必然的に今号の特集テーマは「遠隔授業」となりました。太原先生の巻頭言、奈良先生の総説論文以下、先生方のご実践を幅広くご執筆頂き、また公開講座録やFDの内容等も掲載することができました。従前の一般寄稿も4件掲載しています。原稿をご寄稿くださり、また校正等時間の無い中ご協力を頂いた先生方に、改めて感謝致します。またその校正作業の補助をしてくださった12月から研究所でご勤務頂いた山内りえ子様にもこの場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

本研究所は、今年度より「目白大学高等教育研究所」に改組しました。『人と教育』も、今号（第15号）からはその副題に「高等教育フォーラム」を冠し、冊子のデザイン、内容ともに新たに見直しています。新型コロナウイルスの感染拡大の防止をしながら、研究所として様々な業務を進めるのは非常に困難のあるものでしたが、無事に1年を終えることができ少し安堵しています。ご指導・ご支援頂いた全ての方に、この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。（峯村）

2020年度 高等教育研究所研究員　執筆者の所属は2021年3月末現在のものです

所長 兼 IR推進部門長	今野　裕之	人間学部心理カウンセリング学科教授
研究・FD支援部門長 兼 主任研究員	奈良　雅之	保健医療学部理学療法学科教授
専任研究員	峯村　恒平	学長付助教
兼任研究員	大嶋　玲未	心理学部心理カウンセリング学科専任講師
兼任研究員	村田　久	人間学部子ども学科准教授
兼任研究員	西山　里利	人間学部子ども学科准教授
兼任研究員	渡邉はるか	人間学部児童教育学科専任講師
兼任研究員	前田ひとみ	外国語学部英米語学科准教授
兼任研究員	矢野　秀典	保健医療学部理学療法学科教授
兼任研究員	佐藤佐和子	保健医療学部作業療法学科准教授
兼任研究員	伊藤まゆみ	看護学部看護学科教授

人と教育
第15号

2021年3月31日　発行

発行人●所長 今野裕之
発行所●目白大学高等教育研究所
〒161-8539 東京都新宿区中落合4-31-1
電話●03 (5996) 3187 (直通)
印刷所●株式会社 白峰社
〒170-0013 東京都豊島区東池袋5-49-6
電話●03 (3983) 2312
イラスト●いしばしひろやす

©2021／本紙の写真・イラスト・文章の無断転載を禁ず